

調査活動報告

常民文化研究 第二卷(101113)

民俗学的視点からみた鎌倉地域の妙見

小村 純江

——鎌倉幕府で行われた北斗法と鎌倉地域の安倍晴明の軌跡——

はじめに

本稿は、現在の鎌倉地域の妙見について、その現状を民俗学的な視点から考えるものである。

妙見信仰は北極星や北斗七星を神格化した信仰である。古代、中近東の遊牧民や漁民に信仰された北極星や北斗七星への信仰は、やがて中国に伝わり天文道や道教と混じり合い、仏教に取り入れられて妙見菩薩への信仰となり、中国、朝鮮からの渡来人により日本に伝わったといわれる。仏教とともにあるいは仏教渡来からあまり時を前後しないで日本に伝えられた。

このような経過をたどる妙見信仰は、日本では天文道、密教、道教、陰陽道、神道など複雑な背景が認められる。日本の妙見信仰は妙見菩薩に祈る信仰であるが、同一の仏神でありながら形を変え時代に沿った信仰形態を展開してきたといえる。

奈良・平安時代には執政の中心である公家の間で護国の仏神、王者為政の教導神として篤く信仰され、武士が台頭すると武士の間で守護神や武神として信仰されるようになった。近世以降民衆へと広まった妙見信仰は、地域社会の信仰も取り入れ次第に多彩な様相を定着させ日本各地に広く伝えられていった。

ここで述べる「鎌倉地域」とは現在の鎌倉市域を指すものとする。また本稿では、妙見神、妙見菩薩、妙見尊を妙見と表現し、この三様の区別については明確に行わないこととした。

鎌倉の妙見については、丸井敬司が「鎌倉幕府と妙見信仰―鎌倉幕府で行なわれた尊星王法について―」[2004]の中で、『吾妻鏡』の記事に基づき鎌倉幕府が行った尊星王法そんしょうおうほうについて様々な視点から詳細に分析し、尊星王法の伝来と普及の有様、鎌倉幕府が行った修法など、尊星王法を含む妙見信仰の発展・変容の状況を考察している。しかし、当時の社会は妙見を尊び北斗を拝す風潮のあったことが知られるが、北斗法については論じていない。

中西用康は『妙見信仰の史的考察』[2008]の中で、源頼朝による武家政権の誕生に伴い、この時代に行われた政子の意向が強く反映されたと考えられる鶴岡八幡宮の北斗堂の建立、將軍頼經の大倉北斗堂の建立を根拠に、頼朝と鎌倉武士の北斗妙見信仰について論じている。

鎌倉地域における、妙見との関連が推察できる安倍晴明に関わる研究では、湯山学が「晴明石の謎―鎌倉山ノ内の内と外―」[1999]の中で、晴明の軌跡を歴史的視点から克明に調査・分析し、晴明石の伝承を発端として鎌倉山ノ内地域の内と外の中世から近世への様相について論じている。

これらの研究史は、『吾妻鏡』などの歴史的文献を基に尊星王法や北斗法の視点から鎌倉幕府が行った妙見信仰そして安倍晴明の伝承に関わる歴史的な見解について論じているが、現在の鎌倉の日常生活の中にもみられる妙見については言及していない。

そこで本稿では、鎌倉幕府で行われた北斗法と鎌倉地域の安倍晴明の軌跡を基に鎌倉地域の妙見について民俗学的な視点から考えていくこととし、三つの課題を設定した。

一つ目は、鎌倉幕府が行った北斗法の修法を『吾妻鏡』から調査し、当時の世相を背景に、その位置付けについて考察することである。現在、鎌倉地域では、文献資料から三か所の北斗堂の痕跡を認めることができる。北斗堂では、北斗法、尊星王法など妙見と関わりがあると思われる修法も行われていたと考えられる。

二つ目は、鎌倉地域の安倍晴明の軌跡について、どのような形で

伝えられているのか改めて整理し、現在の人々に投げかける意味を探ることである。鎌倉地域では広く知られているが、山ノ内地域に安倍晴明の軌跡が伝えられている。

そして三つ目は、この二つの調査結果から、現在の鎌倉地域の妙見の位置付けと地域に及ぼす影響を探ることである。

鎌倉の妙見について調査を行ったきっかけは、妙見について、ある地方や限定された祭祀等をテーマとした研究は数多く存在するが、鎌倉地域の妙見について扱ったものはあまり見当たらないことに気付いたからである。

一方、鎌倉幕府を開いた源頼朝は、妙見菩薩を篤信した重臣千葉常胤の館に客として迎えられ、千葉氏の氏寺北斗山金剛授寺（現在の千葉神社）に妙見を拝したことや千葉常胤から贈られた妙見の一手鐙矢なるものを常に枕頭において寝をとっていたという所伝〔中西 2008: 137〕等、妙見に関心が篤かったと思われる俗伝があり、鎌倉地域の歴史的資料の中には妙見との関連が推察できる北斗堂、北斗法、尊星王法などの語句が認められる。また鎌倉山ノ内地域には、妙見との関連が推察できる「安倍晴明の石碑」や「晴明石」なども存在する。これらのことから中世の鎌倉において妙見は何らかの役割を果たしていたと考えられる。

佐野賢治が「妙見信仰の展開を知ることとは日本民族の民俗性を知る手掛かりにもなっているのである」〔佐野 1994: 16〕と指摘しているように、現在の生活の中における妙見の位置付けと地域に及ぼす影響を探り、現代社会の中で妙見はどのような役割を果たして

いるのかを民俗学的な視点から明らかにすることで、日本人の民族性そして歴史書の中に語られていない民族の実態を知ることができるのではないかと考える。

鎌倉地域の妙見については、「現在の鎌倉地域における妙見―民俗学的視点から」〔小村 2021〕で次のように述べた。

現在、鎌倉地域では「形ある妙見」として市文化財四点、石碑等三点、寺院一点を認めることができる（表1）。

これら八点は、江戸時代以降に日蓮宗との関わりの中で伝えられた妙見、あるいは民衆の生活の中に民俗信仰として育まれてきた妙見の痕跡であろう。一方、中世武家社会で信仰されたと考えられる妙見は現存しておらず具体的な痕跡を見出すことはできなかったが、文献資料からその存在を推察できるものが認められる。また、現在の生活の中に伝わる風習、言い伝え等の中にも妙見の伝承を見出すことはできなかった。

このような調査結果であったが、江戸時代の妙見の痕跡や中世の妙見との関連が推測される事象が残されている現在の鎌倉地域に、民俗学的視点からみた妙見が伝えられていないということも一つの結論であると考ええる。その理由は、足利公方成氏が茨城県の古河へ渡座するとともに文化も信仰も悉く古河へ移ってしまったことが、大きな要因であろう。中世武家社会で信仰されたと考えられる妙見は民衆に浸透する以前に、伝える場も伝承者も鎌倉から突然姿を消してしまったと捉えることができるのではないか。

表1 鎌倉地域に伝わる形ある妙見

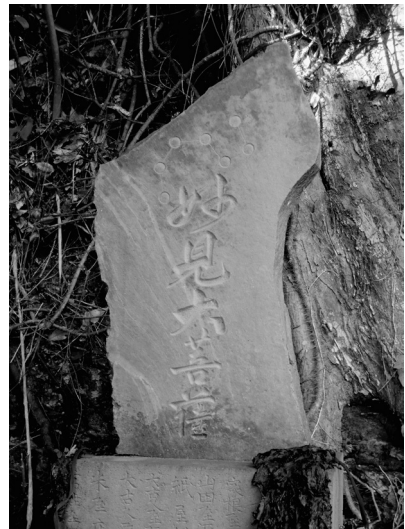
市文化財4点	①青蓮寺 北斗曼荼羅図 ②本興寺 木造妙見菩薩立像 ③妙法寺 木造清正公坐像〔胎内納入品に木造妙見菩薩立像〕 ④妙法寺 木造九曜星立像 八軀〔一軀は新しく制作し現在は九軀〕
石碑等3点	①大倉稲荷参道入口:「妙見大菩薩」と刻まれた石碑(写真1) ②名越大黒堂境内:「北斗尊星」と刻まれた石碑(写真2) ③八雲神社(西御門)本殿裏:「妙見大菩薩」と刻まれた石碑(写真3)
寺社等1点	①妙伝寺:寛永2(1625)年創建。昭和49(1974)年東京都文京区白山から鎌倉に移転。現在の本尊は日蓮坐像だが旧は妙見北辰菩薩像

このような結果を踏まえ、本稿では、民俗学的視点からみた鎌倉の妙見について別の観点から行った調査、妙見の視点に基づく「鎌倉幕府で行われた北斗法」と「鎌倉地域の安倍晴明の軌跡」の二点について報告する。

今回の調査は、『吾妻鏡』の記事に基づいて述べた事象が数多くある。

『吾妻鏡』は、現存部分は欠巻一卷を含め五二巻。治承四(一一八〇)年四月以仁王、源頼政の挙兵から、文永三(一二六六)年七月前將軍宗尊親王の京都送還まで、約八七年間の鎌倉幕府六代の將軍の年代記である。記事の内容は、鎌倉幕府の動きや東国の情勢、御家人の在り方などが中心で中間に一〇年分の欠落があるが、鎌倉時代の基本史料であり、当時の妙見について民俗学的な視点から考え

- 写真1 (右上) 大倉稻荷参道にある「妙見大菩薩」と彫られた石碑
 写真2 (左下) 名越大黒堂境内にある「北斗尊星」と彫られた石碑
 写真3 (右下) 八雲神社(西御門)本殿裏にある「妙見大菩薩」と彫られた石碑～主銘の上に北斗七星が彫られている



る一面を示す資料として、ここでは新訂増補国史大系版『吾妻鏡』に依拠する『現代語訳吾妻鏡』1～16「五味・本郷・西田編2007～2015」を使用した。

一 『吾妻鏡』の時代の陰陽道と北辰 北斗信仰、鎮宅霊符信仰

調査内容を報告する前に、『吾妻鏡』の時代の武家政権の背景にある信仰、具体的には陰陽道、北辰北斗信仰、鎮宅霊符信仰などについて妙見の視点から概括する。

1 日本での陰陽道の成立

古代中国で成立した陰陽五行説は五～六世紀ごろ日本に伝わった。そして「日本に古くからあった民間の呪術的信仰を基礎とし、それに中国の陰陽、五行、易ほくろ、緯書、天文や神仙などの思想、暦術や占星術、および一部の道教の信仰までも加えて成立した、呪術的傾向の強い方術」[窪 1994: 328]と考えられる陰陽道として日本独自に発展し、奈良・平安時代の宮廷貴族たちの信仰を集めた。この中の占星術が星の信仰として陰陽道の中心的思想を形成し民間にも広まったという。星は、日本では人を守ってくれるありがたい

存在として受容されたが、彗星については、その出現は凶事の前兆とされ、鎌倉幕府では彗星除去のための様々な祈禱が行われている。陰陽道では、また日を忌む方位・方角の吉凶にあたっては、往亡^{（おうち）}日^{（にち）}、坎日^{（かんにち）}、鬼門などに注意を払い、邪気を払う秘法の一つとして、禹歩法^{（うほ）}が取り入れられていた。

2 日本での北辰北斗信仰

中国では、北極星は北辰とよばれ、北極星を神として祭る信仰を北辰信仰といった。北極星は、多くの星の中心であることから天帝太一神の居所をも意味する高貴な星として崇拜され、北斗七星は、天帝の乗物つまり天帝の権威の象徴そして人々の生死禍福を司る神として広く信仰された。

中国で信仰された北辰北斗信仰の日本への伝来時期は明確ではないが、早くに伝えられたという。日本にもたらされた北辰北斗信仰は、星の信仰の代表として陰陽道と同時に密教にも取り入れられ妙見菩薩を祀る妙見信仰として展開し、妙見堂や妙見社が各地に建てられていった。

平安時代の日本では次第に北斗七星を北辰と混同するようになり、北極星、北斗七星はともに北辰と解釈されるようになっていった。北辰を東密（真言宗系）では妙見菩薩、台密（天台宗系）では尊星王とよび、その修法を東密では北斗法、台密では尊星王法という。

この時代、朝廷は北斗法、尊星王法、妙見菩薩を本尊とする妙見供などの修法を盛んに行い、除災、天変地異の鎮め、国土の安寧、彗

星の退散、治病、安産などを祈願した。この三つの修法は天皇が営ませることを原則としていたが、やがて鎌倉時代に入り承久三（一二二二）年の「承久の乱」以降には、鎌倉幕府もこれらの修法を行うようになり、月蝕や元寇の際にも北斗堂等で北斗法が修されている。室町時代にも除災等を目的として将軍が北斗法を修させている。

北斗法は、北斗供、北斗七星法ともいい、一字頂輪王を本尊とし、息災延命、天変地妖等の除災のために北斗七星を供養する日本独自の密教の修法である。『星の文化史事典』には「北斗七星護摩秘要儀軌」他の経典にもとづいた日本独自の北斗七星信仰の儀式の一つであり、宮廷では九六〇年に行なわれたとあるのが最も古い記録である」と述べられている[出雲 2012: 342]。壇を設け、北斗曼荼羅（星曼荼羅）を掲げて供養する。「北斗曼荼羅は、北斗法が行なわれるようになってしばらくして制作されるようになった日本の密教の曼荼羅」[出雲 2012: 342]で、「天台は円曼荼羅、東寺は方曼荼羅を用いた。星曼荼羅は中央に北斗七星、その外側に十二宮、更にその外側に二十八宿を配し、いずれも絵図化したものであり、仏教宇宙観を表現したものである」[金指 1974: 190]。

尊星王法は、「北辰を妙見菩薩の化身として護摩をたいて祈る修法」であり[出雲 2012: 202]、天台宗寺門派では妙見菩薩を尊星王と呼び尊星王法が特別な修法とされた。

妙見供は、一字頂輪王の代わりに妙見菩薩を中心に北斗七星、二十八宿などを配した曼荼羅を懸け、妙見を供養する修法である。

北斗法は、多くは北斗堂で修されたと思われる。北斗堂は北斗七

星を祀る堂で貪狼星、巨門星、祿存星、文曲星、廉貞星、武曲星、破軍星の七星を本尊として祀り加持祈禱を行う施設というべきもので、堂供養にも北斗法が修された。白河院の時代、多くの北斗堂が建立されたが、源実朝や北条政子も北斗を信仰し、鶴岡八幡宮の境内に北斗堂を建立している。

日本では北斗と妙見について様々な解釈が行われ、妙見として北斗を信仰していたこともあったと考えられる。北斗供¹¹妙見供とは言い切れないが、北斗法、尊星王法、妙見供はいずれも北斗七星を供養する修法であり、北辰北斗信仰は妙見を反映していると捉えることができる。

3 日本に伝来した鎮宅靈符信仰

『鎮宅靈符』とは、図の中央に真武神（鎮宅靈符神）が描かれ、その周囲に道教經典に由来する七十二種類の靈符（お札）がぎっしり書き込まれたものであり「平瀬 2013: 21」、この靈符を司る神を鎮宅靈符神といい、靈符を使った呪法により家内安全を守護する。真武神は、中国では古来北天の守護神とされた。同じように北極星、北斗七星に対する尊崇から生まれたのが、仏教信仰の中の妙見菩薩である。金指正三は「鎮宅靈符神はすなわち妙見菩薩のことである。〔中略〕仏家が尊崇する妙見菩薩を、陰陽家は鎮宅靈符神として崇拜している」と述べている〔金指 1974: 17〕。

鎮宅靈符信仰の日本への伝来時期は明確ではないが中世初期ともいわれる。新しい道教思想として中国から伝えられ、妙見菩薩、天

御中主尊や国常立尊等諸神仏と習合し、陰陽道をはじめ日本の信仰に大きな影響を与えた。

鎌倉時代、陰陽道の担い手である陰陽師は鎮宅靈符神を篤く崇拝し、鎌倉幕府の將軍のために祭祀や祈禱を執り行った。

妙見を祀る寺社では現在も鎮宅靈符を授与していることがあり、鎮宅靈符信仰の影響を受けた妙見は中世社会に深く関わっていたことが察せられる。

4 陰陽師と鎌倉幕府

『吾妻鏡事典』には中世の陰陽師について、「天災などの自然現象、怪異といった超自然現象は、為政者に対する天の評価と考えられたため、特殊な技能を持つ者の手によってその神意を量り為政者はそれに沿った行動をとる必要があった。そうした占いを主に司ったのが陰陽師である」と述べられている〔佐藤・谷口編 2007: 237〕。陰陽道に携わる陰陽師は、朝廷の中務省陰陽寮に属し「六壬式占でさまざまな災害や怪異現象を占い、天皇や貴族はその占文に従って物忌を行い、厄難を除く祭祓を修した」という〔福田ほか編 1999: 298〕。「平安時代中期には、陰陽博士賀茂忠行、保憲父子が出て、陰陽師を世襲化し、賀茂家に曆道を伝えた。その高弟の天文博士安倍晴明（九二一―一〇〇五）は、伝説的な方術の達人で、式神（鬼神）異類を思いのままに駆使して、異変を予知し、予言したとされる」〔村上 1988: 49〕。安倍晴明の占いや予言をたたえた説話は『今昔物語集』『古今著聞集』にも多く記されている。安倍家

は、天文道を伝え、こののち賀茂、安倍両家が陰陽道を独占的に支配し鎌倉・室町幕府にも奉仕した。

『吾妻鏡事典』にはまた「本格的に〔鎌倉〕幕府に陰陽師が導入されたのは、摂関家の子弟九条頼経が四代將軍となつてから」とある〔佐藤・谷口編 2007: 238〕。「なかでも現任の陰陽権助につく安倍国道は、〔中略〕鎌倉で初めて四角四境祭⁽⁶⁾を行い都市鎌倉の境界と祭祀システムを構築するなど、幕府内における鎌倉陰陽師の地位を固めることに尽力した。〔中略〕鎌倉陰陽師の職掌の第一は鎌倉殿を守ることである。彼らは鎌倉殿が病んだり周辺で怪異が発生したりすると、これを占い、祭祀を執行した。また、鎌倉殿の行動や諸行事にさいして日時や方角の吉凶を具申した」「五味ほか編 2016: 150〕。『吾妻鏡』の時代、陰陽師の呪術や祈禱によって多くの事象が速やかに処理されていたことが察せられる。

二 鎌倉幕府で行われた北斗法

ここでは、妙見を反映していると捉えることのできる北斗法、尊星王法、妙見供の三つの修法のうち鎌倉幕府が行った北斗法について、『吾妻鏡』の記事から調査した内容を述べていく。北斗法を調査の対象とした理由は次の二点である。

一点目は、妙見菩薩の密教修法である尊星王法は丸井敬司の「鎌倉幕府と妙見信仰―鎌倉幕府で行なわれた尊星王法について―」〔2004〕に詳しく述べられており、妙見供については『吾妻鏡』の

中に認めることができなかったためである。

二点目は、『吾妻鏡』の時代（一一八〇～一二六六）日本では、北斗と妙見について様々な解釈が行われ、妙見として北斗を信仰していたこともあったと考えられるためである。先に述べたように、北斗供¹妙見供とは言い切れないが、北斗法、尊星王法、妙見供はいずれも北斗七星を供養する修法であり、北辰北斗信仰は妙見を反映している⁽⁷⁾と捉えることができることから、『吾妻鏡』の記事にある北斗法は妙見の要素を含んでいるといえることができる。

北斗法の修法は主に北斗堂で行われたと考えられることから、最初に鎌倉地域の北斗堂について述べる。

1 鎌倉地域の北斗堂

鎌倉地域には、一二〇〇年代に雪ノ下北斗堂、大倉北斗堂、甘縄北斗堂の三つの北斗堂が存在した記録があるが（図1）、いずれも現存していない。

源実朝や北条政子は北斗を信仰し鶴岡八幡宮寺の境内に北斗堂を建立しており、また鎌倉時代には月蝕や元寇の際にも北斗堂等で北斗法が修されている。

（1）雪ノ下北斗堂（鎌倉市雪ノ下、図1の★1）

『新編相模国風土記稿』（以下『相模風土記』と記す）『新編鎌倉志』『鎌倉攪勝考』『吾妻鏡』『鶴岡八幡宮寺』等から次のようなことが分かる。

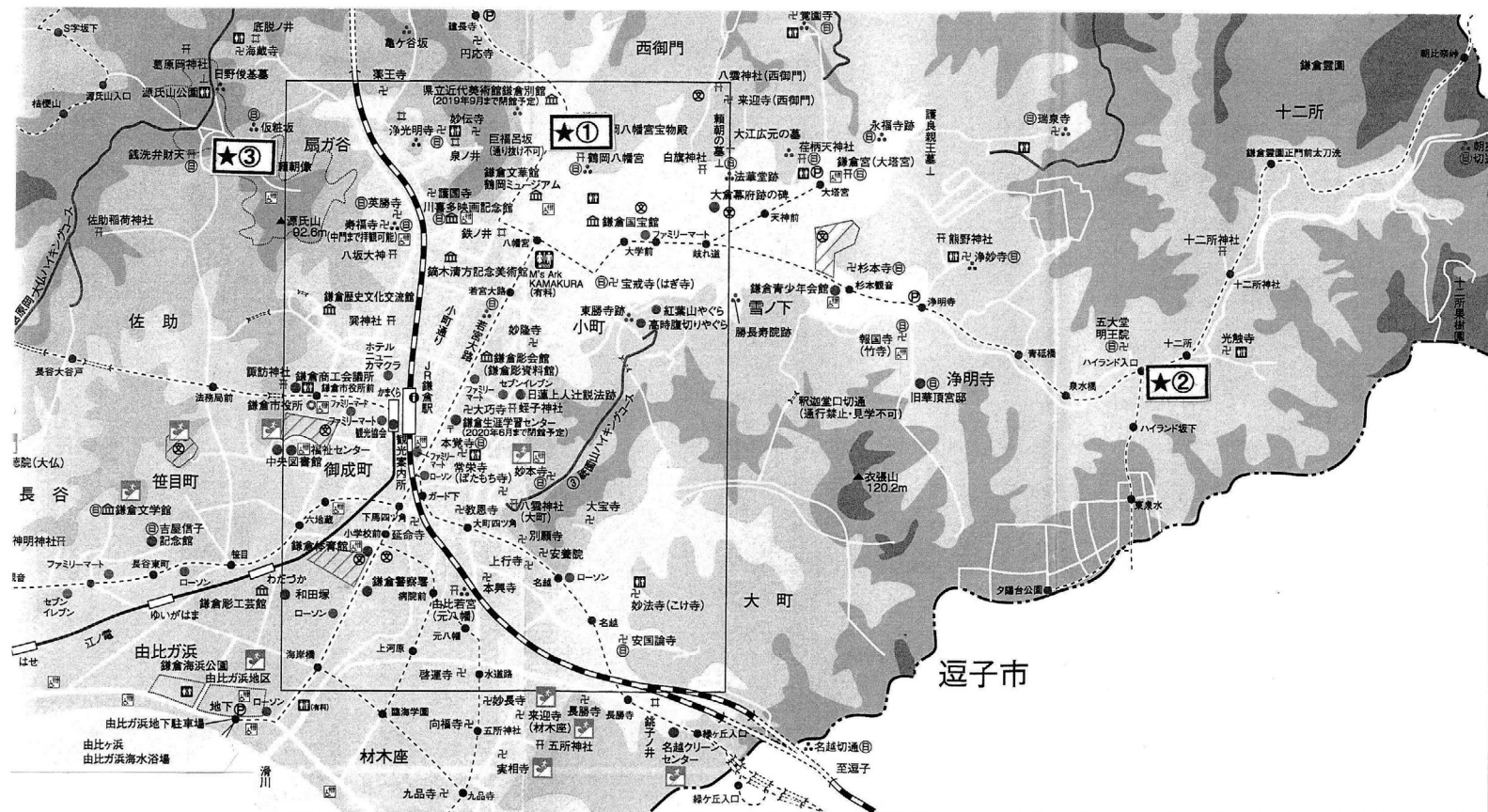


図1 鎌倉地域の北斗堂の位置

「鎌倉」(鎌倉市市民生活部観光課編集・発行 2018年6月)の地図「歩いてふれよう古都「鎌倉」」の一部分に、筆者が★①、★②、★③を加筆した⇒★①：雪ノ下北斗堂、★②：大倉北斗堂、★③：甘縄北斗堂

建保四（一二一六）年八月十九日、実朝の祈願所として鶴岡宮（現在の鶴岡八幡宮）の傍に別當定暁僧都が北斗堂を建立。この日に供養を行った。北条政子も参堂している。弘安三（一二八〇）年と永仁四（一二九六）年の火災で焼失、応永中（一三九四～一四二八）に再興された。天正の修理図（天正一九（一五九一）年）には、今の祖霊社の辺りと思われる箇所に北斗堂（方三間）があるが、寛永元（一六二四）年に起工し三年を要した鶴岡八幡宮寺（現在の鶴岡八幡宮）の修造で消滅したという。

（2）大倉北斗堂（鎌倉市十二所、図1の★2）
『相模風土記』『新編鎌倉志』『鎌倉攬勝考』『吾妻鏡』等から次のように解釈できる。

四代將軍九条（藤原）頼經の祈願所として嘉禎元（一二三五）年十二所に真言宗寺院五大堂を建立し、五大明王の像を堂内へ安置して明王院と号した。この五大堂の建立地は、当初二階堂に予定されたが、甘縄に変更となり、さらに頼經の御所から鬼門に当たる十二所の地に定めなおしたとある。現在、明王院五大堂内の明王像は、不動尊一体だけが当時のもので、外の四体は寛永年中（一六二四～一六四四）に焼亡し、その後造立されたものである。仁治二（一二四一）年には明王院五大堂の郭内に北斗堂が建立されたが、いつの日か廃れてなくなってしまったという。

（3）甘縄北斗堂（鎌倉市佐助、図1の★3）
『相模風土記』第四卷山之内庄大町村条の佐介ヶ谷に、此介内に北斗堂谷など字するところありと述べられ「蘆田編集校訂 1988・283」、また山之内庄扇ヶ谷村条に「北斗堂蹟 同所〔佐介谷〕にあリ」とある「蘆田編集校訂 1998：341」。『吾妻鏡』弘長三（一二六三）年八月二十五日条には「亥の刻に甘縄で火事があつた。北斗堂の辺りの民家が多く被災したという」と記されている「五味・本郷・西田編」16「2015：527」。

当時の甘縄は、『鎌倉の地名由来辞典』によると「現在の長谷東部、長谷観音前交差点より下馬交差点方向へ延びる由比ガ浜大通りのうち、笹目町辺りを東限とし、北は佐助・無量寺谷までを含む」とあり「三浦編 2005：67」、古くは現在の鎌倉駅の西・西北・西南地域を含む広い地域で佐介も甘縄に含まれていたことが分かる。

これらの資料から甘縄北斗堂は、佐介ヶ谷にあったと考えられること、弘長三（一二六三）年、甘縄で火事があり北斗堂辺りの民居が多く焼けたということ以外は詳しいことは分かっていない。

現在も、JR鎌倉駅西口から西へ二〇分ほど歩いたところになるが、銭洗弁天へ向かう坂道のおもとに広い畠があり周囲が住宅地となっている辺りに、北斗堂という字名が残されている。

2 『吾妻鏡』に記された北斗法

主に北斗堂で行われたと思われる北斗法（北斗供、北斗護摩、北斗を含む）について、『現代語訳吾妻鏡』1～16「五味・本郷・西

鎌倉幕府が行った北斗法～『吾妻鏡』の記事から

資料A-2

	年	元号	年	月	日	目 的	修 法	場 所
⑰	1236	嘉禎	2	9	13	天変に対する御祈禱として七壇の北斗護摩が行われた。【天変が出現しているため】	七壇の北斗護摩	
⑱	1239	延応	元	8	10	天変の御祈禱などが行われた。【7月28日条に、7月11日以降、毎晩天変が出現しているとの記述あり】	北斗護摩	
尊星王法	1240	延応	2	正	8	戌の刻に彗星が歳星に近づいた〔距離は二尺余り〕。今日、天変の御祈禱の護摩が始められた。【正月2・4・7日に彗星出現。その後もたびたび出現、2月6日条に「夜になって彗星が出現した。正月4日より今日に至るまで消えることがない」との記述あり。2月14日収まる】		尊星王
⑲	1240	延応	2	正	17	鶴岡（八幡）宮寺で百人の僧に命じて仁王百講が行われ、將軍家（藤原頼経）が参られた。これは彗星の出現による。【正月2・4・7・8・9・11日に彗星出現。その後もたびたび出現。2月6日条に「夜になって彗星が出現した。正月4日より今日に至るまで消えることがない」との記述あり。2月14日収まる】	七壇の北斗供	鶴岡（八幡）宮寺
参考Ⅲ	1241	仁治	2	8	25	午の刻に〔新造の〕北斗堂の供養が行われた。將軍家（藤原頼経）〔御束帯・御牛車〕が参堂された。曼陀羅供の儀である。（中略）今日の供奉人の行列（は以下の通り⇒57名の名がある）。【この北斗堂は四代將軍藤原頼経が、五大堂明王院のうちに建立したもので、俗に大倉北斗堂という】	大倉北斗堂建立に伴う供養	大倉北斗堂
⑳	1244	寛元	2	正	8	天変の御祈禱が行われた。【昨年12月29日に白虹が日をつらぬいた天変について、祈禱などを始めるよう正月6日に命じた】	北斗法	尊星王法
㉑	1244	寛元	2	正	16	朝から戌の刻までまったく雲が無かった。月蝕の時刻になって、南西の方角から、ちぎれ雲が現れ、たちまち全天を覆い、霧雨が頻りに降った。復末の時刻の後、明るく澄み渡った月が早く現れた。（中略）隆弁法印は去る8日より明王院の北斗堂に参籠し祈願していた。【天変の御祈禱】	（北斗法）	明王院北斗堂
㉒	1244	寛元	2	6	3	天変の御祈禱が行われた。【2日に、日照のため祈雨法を鶴岡八幡宮に命じた】	北斗護摩	尊星王法
尊星王法	1245	寛元	3	10	9	今日、天変の御祈禱などが始められた。【天変が出現しているため】		尊星王供
㉓	1245	寛元	3	12	24	翌年正月1日の日蝕について、その審議が行われた。今日、御祈禱などが始められた。【翌年正月1日に予測された日蝕は正現しなかった】	北斗護摩	
尊星王法	1247	宝治	元	5	9	左親衛（北条時頼）の御祈禱として尊星王護摩が始められた。【將軍頼嗣の御台所（北条時頼の妹）が4月中旬から病（邪気）のため、祈禱や治療にその努力が続けられてきたが、5月13日に18歳で亡くなった】		尊星王護摩
㉔	1250	建長	2	12	13	今日、相州（北条時頼）の妻室が着帯され、鶴岡の別当法印〔隆弁〕がこれに加持を行った。（中略）また御祈禱などが始められた。【8月27日条に、相州（北条時頼）の妻室の懷妊（時宗を懷妊）の記述あり】	北斗供	
㉕	1252	建長	4	6	19	祈雨を鶴岡別当法印隆弁に命じられた。清左衛門尉（清原）満定がその御教書を持って御使者として、その雪下の本坊に赴いた。そこで（隆弁は）承知し、申の刻になって（鶴岡）八幡宮の東の廊で北斗法を始めた。晩になって空がいくらか曇ったという。これは去る10日に和泉前司（二階堂）行方を奉行として命じられたが、固辞していた。（そのため）昨日〔18日〕相州（北条時頼）が対面され、親王家（宗尊）御下向の後には天下泰平・関東静謐であるが、早魃の一事が既に庶民の愁歎となっており、特に祈禱されるよう懇請されたという。【6月20日から23日まで連日雨が降った】	北斗法	（鶴岡）八幡宮の東の廊
㉖	1252	建長	4	7	28	相州（北条時頼）が北斗供を修された。これは妻室の懷妊（宗政を懷妊）の御祈禱である。【10月3日条に、鶴岡の別当法印〔隆弁〕が、時頼の妻室の着帯の加持を行った記述あり】	北斗供	
㉗	1260	文応	元	9	5	辰の刻に將軍家（宗尊）が沐浴された。（中略）また御所で北斗法〔七日間〕が行われ、若宮別当僧正（隆弁）が奉仕した。【8月7日將軍家（宗尊）が赤痢の病を患うが、20日ごろから快方に向かい、9月5日に沐浴】	北斗法（七日間）	御所
尊星王法	1266	文永	3	正	12	彗星の変異の御祈禱。【昨年12月14・18・27日、1266年正月1日に彗星出現】		尊星王法

※『現代語訳吾妻鏡』1～8（五味文彦・本郷和人編 2007～2010 吉川弘文館）、『現代語訳吾妻鏡』9～16（五味文彦・本郷和人・西田友広編 2010～2015 吉川弘文館）を基に筆者が作成。

※参考Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ：北斗堂建立に伴う供養。北斗法の記述はないが、参考Ⅰ・Ⅱは1216年の雪ノ下北斗堂の、参考Ⅲは1241年の大倉北斗堂の建立に伴う供養。

※尊星王法は妙見菩薩の密教修法の一つであることから、ここに併記したが、尊星王法のみが行われた条は□で示した。

※㉑は、寛元2（1244）年正月8日から引き続き北斗法が行われていたものと解釈した。

鎌倉幕府が行った北斗法～『吾妻鏡』の記事から

資料A-1

	年	元号	年	月	日	目 的	修法	場所
参考Ⅰ	1216	建保	4	8	19	鶴岡（八幡）宮の側に別当の定暁僧都が北斗堂を建立し、今日、供養が行われた。小河法印忠快が導師を勤め、尼御台所（政子）が堂に入られた。【この北斗堂は、俗に雪ノ下北斗堂という】	雪ノ下北斗堂建立に伴う供養	雪ノ下北斗堂
参考Ⅱ	1216	建保	4	10	29	将軍家（源実朝）の御願として、鶴岡（八幡宮）の北斗堂で、一切経供養が行われた。導師は三位僧都定暁で、（実朝が）出かけられた。御台所（実朝室）が牛車に同乗され、相州（北条義時）が付き従った。	雪ノ下北斗堂建立に伴う供養	鶴岡（八幡宮）の北斗堂
①	1223	貞応	2	9	10	天変の御祈禱が始められた。【このところ続けて天変が出現しているため】	北斗護摩	尊星王護摩
②	1224	貞応	3	10	16	天変の御祈が行われた。【天変が出現しているため】	北斗護摩	
③	1226	嘉禄	2	2	5	天変の御祈禱が行われた。【天変が出現しているため】	北斗供	
④	1226	嘉禄	2	8	7	天変・地震の御祈禱などが行われた。【6月26・27・28日、7月1日、8月1日（大きな揺れ）に地震があった】	北斗	
⑤	1226	嘉禄	2	11	26	天変の御祈禱などが始められた。【天変が出現しているため】	北斗供	
⑥	1227	嘉禄	3	3	24	三合ならびに地震の御祈禱などが始められた。【3月7日に大地震、15日にも地震があった】	五座北斗護摩、北斗供	
⑦	1227	嘉禄	3	4	29	（頼経の）御病気のため御祈禱が始められた。【将軍家（藤原頼経）は4月2日に気分がすぐれず、その後も時おり病を発症。4月27日から少し快方に向かう】	北斗護摩	尊星王護摩
⑧	1227	嘉禄	3	9	9	天変の御祈禱が今日、始められた。【9月3日に大地震があった】	北斗供	
⑨	1227	嘉禄	3	11	24	（頼経が）御病気で特に苦しみました。そこで再び御祈禱などが行われ、伊豆・箱根・三島にそれぞれ奉幣が行われた。（中略）また秘法などが行われた。【11月18日将軍家（藤原頼経）が病気になる23日に赤斑の腫物が現れた。総じて先月下旬から赤斑の腫物が広がり、貴賤を問わず、上下が皆患い、京都も同様という。将軍家（藤原頼経）は11月28日から快方に向かう】	北斗供	
⑩	1228	安貞	2	5	22	御祈禱などが始められた。【5月15日に大地震があった】	北斗供	
⑪	1228	安貞	2	10	30	（天変の）御祈禱などを始めた。【天変が出現しているため】	北斗供	
⑫	1229	安貞	3	3	1	今日、天変の御祈禱などが始められた。【2月5日に地震、17日に大地震があった】	北斗供	
⑬	1232	寛喜	4	2	7	御台所（頼経室）が御病気で、今日の日中以降、たいそうお苦しみという。そこで御祈禱などが行われた。【2月13日、御台所（頼経室）の病は少しよくなり、23日に沐浴】	北斗供	
⑭	1232	貞永	元	閏9	10	天変に対する御祈禱が始められたという。【閏9月4・8・9日に彗星のようなものが出現、15日収まる】	北斗	尊星王
⑮	1232	貞永	元	10	14	夜になって、天変に対する御祈禱として御所で七壇の北斗護摩が始められた。【10月5日条に「先月28日より今朝に至るまで、彗星が連夜出現し」との記述あり】	七壇の北斗護摩	御所
尊星王法	1235	嘉禎	元	12	24	重ねて御祈禱を行うため、諸所の本宮で大般若経を転読させて御神楽を行うよう命じられ、担当者をつけられた。そこで、それぞれ使者を遣わした。（御祈禱を）勤めさせるためである。【11月18日将軍家（藤原頼経）が病を発症し、12月18日痲瘡が現れた気配あり。翌年正月9日沐浴。正月17・19日、2月1日に痲瘡の後遺症の記述あり】		尊星王護摩 鶴岡八幡宮本宮
⑯	1235	嘉禎	元	12	26	今朝の明け方、御所の南庭で如法泰山府君祭が行われた。（中略）今日、（頼経が）少し御食事を召し上がられた。（中略）今日の夕方、御祈禱が始められた。【11月18日将軍家（藤原頼経）が病を発症し、12月18日痲瘡が現れた気配あり。翌年正月9日沐浴。正月17・19日、2月1日に痲瘡の後遺症の記述あり】	北斗護摩	御所の南庭

田編 2007～2015」を基に調査したところ、『吾妻鏡』の時代である一一八〇年から一二六六年までの八七年間に、鎌倉幕府では二七回北斗法を修していたことが認められた。概要は資料A「鎌倉幕府が行った北斗法」『吾妻鏡』の記事から」に示した。

(1) 北斗法を修した目的(資料A参照)

●天変によるもの(二〇件)

【天変・地震の祈禱】(四件)

④嘉禄二(一二二六)年八月七日〈北斗〉↓六月二六・二七・二八日、七月一日、八月一日(大きな揺れ)に地震があった

⑧嘉禄三(一二二七)年九月九日〈北斗供〉↓九月三日に大地震があった

⑩安貞二(一二二八)年五月二二日〈北斗供〉↓五月一日に大地震があった

⑫安貞三(一二二九)年三月一日〈北斗供〉↓二月五日に地震、一七日に大地震があった

【三合ならびに地震の祈禱(一件)】

⑥嘉禄三(一二二七)年三月二四日〈五座北斗護摩、北斗供〉↓三月七日に大地震、三月一日にも地震があった

【彗星の出現】(三件)

⑭貞永元(一二三二)年閏九月一〇日〈北斗〉↓閏九月四・八・九日に彗星のようなものが出現、一五日収まる

⑮貞永元(一二三二)年一〇月一四日〈七壇の北斗護摩〉↓一〇月

五日条に「先月二十八日より今朝に至るまで、彗星が連夜出現し」との記述あり

⑲延応二(一二四〇)年一月一七日〈七壇の北斗護摩〉↓正月二・四・七・八・九・十一日に彗星出現。その後もたびたび出現。二月六日条に「夜になって彗星が出現した。正月四日より今日に至るまで消えることがない」との記述あり。二月一四日収まる

【祈雨】(二件)

②②寛元二(一二四四)年六月三日〈北斗護摩〉↓六月二日に、日照のため祈雨法を鶴岡八幡宮に命じた

②⑤建長四(一二五二)年六月一九日〈北斗法〉↓六月二〇日から二三日まで連日雨が降った

【日蝕】(一件)

②③寛元三(一二四五)年一二月二四日〈北斗護摩〉↓翌年正月一日に予測された日蝕は正現しなかった

【月蝕】(一件)

②①寛元二(一二四四)年正月一六日〈北斗法〉↓月蝕の時刻にちぎれ雲が現れ全天を覆い、霧雨が頻りに降った。復末の時刻の後、明るく澄み渡った月が現れた

【白虹が日をつらぬく】⁽⁸⁾(一件)

②②②寛元二(一二四四)年正月八日〈北斗法〉↓昨年一二月二九日に白虹が日をつらぬいた天変について、祈禱などを始めるよう正月六日に命じた

【その他天変の御祈禱・御祈】(七件)

- ①貞応二（一二二三）年九月一日〈北斗護摩〉
 - ②貞応三（一二二四）年一〇月一六日〈北斗護摩〉
 - ③嘉禄二（一二二六）年二月五日〈北斗供〉
 - ④嘉禄二（一二二六）年一月二六日〈北斗供〉
 - ⑤安貞二（一二二八）年一〇月三〇日〈北斗供〉
 - ⑥嘉禄二（一二三六）年九月一三日〈七壇の北斗護摩〉
 - ⑦延応元（一二三九）年八月一〇日〈北斗護摩〉
- 將軍家の病によるもの（五件）
- ⑦嘉禄三（一二二七）年四月二九日〈北斗護摩〉↓將軍家（藤原頼経）は四月二日に気分がすぐれず、その後も時おり病を発症。四月二七日から少し快方に向かう
 - ⑨嘉禄三（一二二七）年一月二四日〈北斗供〉↓一月一八日將軍家（藤原頼経）が病気になる一二三日に赤班の腫物が現れた。総じて先月下旬から赤班の腫物が広がり、貴賤を問わず、上下が皆患い、京都も同様という。將軍家（藤原頼経）は一月二八日から快方に向かう
 - ⑬寛喜四（一二三二）年二月七日〈北斗供〉↓御台所（頼経室）が病気になる祈禱などが行われた。二月一三日御台所（頼経室）の病は少しよくなり二三日に沐浴
 - ⑯嘉禄元（一二三五）年一月二六日〈北斗護摩〉↓一月一八日將軍家（藤原頼経）が病を発症し、一月一八日疱瘡が現れた気配あり。翌年正月九日沐浴。正月一七・一九日、二月一日に疱瘡の後遺症の記述あり

⑳文応元（一二六〇）年九月五日〈北斗法（七日間）〉↓八月七日將軍家（宗尊）が赤痢の病を患うが、二〇日ごろから快方に向かい、九月五日に沐浴

●妊娠によるもの（二件）

㉔建長二（一二五〇）年二月一三日〈北斗供〉↓北条時頼の妻室の帯祝いのため。八月二七日程に、相州（北条時頼）の妻室の懐妊（時宗を懐妊）の記述あり

●懐妊によるもの（二件）

㉔建長四（一二五二）年七月二八日〈北斗供〉↓北条時頼が妻室の懐妊（宗政を懐妊）のため行ったもの。十月三日条に、鶴岡の別当法印（隆弁）が時頼の妻室の着帯の加持を行った記述あり

（2）調査から読み取れること

『吾妻鏡』八七年間（一一八〇～一二六六）の記事の中に二七回の北斗法（北斗供、北斗護摩、北斗を含む）の記述があるが、それは一二三三年から一二六〇年の三八年間に修されたものであった。この間に鎌倉幕府では年に一〜四回北斗法を行っている。一二三三年以降というと、承久三（一二二二）年の「承久の乱」がきっかけとなったことが推察される。「承久の乱」での朝廷側の敗北により公家政権は衰え、幕府権力が確立し、その力は全国に及ぶこととなった。天皇が修するのが常であった尊星王法を一二三三年以降鎌倉幕府が行うようになったことについて丸井敬司は「承久の乱の圧倒的な勝利により、実力で朝廷を凌駕することによって可能となったと思

われる」[丸井 2004: 19]。また「天変という国家的災厄の息災を幕府が行ったところに特徴がある。これまで天変に対する尊星王法の修奉は、朝廷が行ってきたものであり、これは、天命思想によれば、統治者である皇帝(院・天皇)が行うものであった。これを幕府が行ったことは、幕府が国家鎮護の役割を担う立場に立ったと認識することが必要である」と述べている[丸井 2004: 17]。同じように北斗法も一二三年以降鎌倉幕府が行うようになったが、これは鎌倉幕府が実質的な統治者の立場に立ったことを意味している。

『吾妻鏡』は、文永三(一二六六)年七月二〇日の鎌倉幕府六代將軍宗尊親王が京都の六波羅に到着したとの記事をもって終わっているが、それ以降も月蝕や元寇の際に北斗堂等で北斗法が行われており、また室町時代にも除災等を目的として將軍が北斗法を行わせた記録がある。

『吾妻鏡』に記述された北斗法二七件の修法の目的は、「天変によるもの」二〇件、「將軍家の病によるもの」五件(⑦⑨⑬⑮⑰⑲)、「妊帯によるもの」一件(⑳)、「北条時頼が行った妻の「懷妊によるもの」一件(㉑)であった。「天変によるもの」は北斗法修法全体の七〇%以上を占めており、その内訳は、地震五件(一件は「三合ならびに地震」、彗星三件、祈雨二件、日蝕・月蝕・白虹各々一件、その他の天変七件であった。この時期、災害が起こるたびに北斗法以外の密教の修法や陰陽道の祭祀も行われており、幕府が強い支配力を持って国家鎮護の役割を果たしていることが分かる。

地震については五件の北斗法修法の記述があるが、国立天文台編纂の『理科年表』(二〇二二)によると、『吾妻鏡』の時代に大きな被害を出した地震は次のとおりであった。

- ・建暦三(一二一三)年五月二一日…山崩れ、地裂け、舎屋が破損した。
- ・嘉祿三(一二二七)年三月七日…地裂け、所々の門扉・築垣が転倒した。
- ・寛喜二(一二三〇)年閏正月二二日…大慈寺の後山が崩れた。
- ・延応二(一二四〇)年二月二二日…鶴岡神宮寺が風がないのに倒れ、北山が崩れた。
- ・仁治二(一二四一)年四月三日…津波を伴い、由比ヶ浜大鳥居内拝殿流失、岸にあった舟一〇艘が破損した。津波は風浪とする説もある。
- ・正嘉元(一二五七)年八月二三日…鎌倉の社寺に無事なものはなく、山崩れ、家屋転倒し、築地悉く破損。地割れを生じ、水が湧き出た。余震多数。

[国立天文台編 2022: 777]

資料Aで述べた北斗法の修法の目的を地震とする五件(④⑥⑧⑩⑫)のうち、『理科年表』にある大地震と結びつくのは⑥(嘉祿三(一二二七)年三月七日)のみであるが、『吾妻鏡』には『理科年表』に記載されていないやや大きな地震の記述も数多く見ることができ。また『理科年表』の記録から、鎌倉周辺では、『吾妻鏡』の時

代は他の時代に比べて地震が統発していたことを読み取ることができる。

彗星の出現については三件の北斗法修法の記述がある。

彗星について『世界大百科事典』には「ときには長い尾を引いて、ほうきの形に見え（ほうきぼし）とも呼ばれる。〔中略〕予告もなく、突然出現し、姿、形を変える大すい星の存在は太古から知られていて、日・月食などとともに人々の恐怖的となり、迷信の対象となっていた。〔中略〕どこの民族も恐怖を感じて、それを戦争、疫病、大日照、飢饉などの凶兆と信じていた」とあり「下中編 2005：564-566」、日本では星はありがたい存在として受容されたが、彗星は、その出現が凶兆として恐れられていたことが推察できる。

『吾妻鏡』には数多くの彗星の記事がみられるが、彗星が現れる前後周辺の年は飢饉・大災害などにみまわれることも多く、北斗法ばかりでなく他の修法や陰陽道の祭祀による彗星出現に対する祈禱の記事も全編を通じてみることができる。『吾妻鏡事典』には一二二二年に七六年周期のハレー彗星が接近し、北斗法ではないが物々しい祈禱が行われたと述べられている〔佐藤・谷口 2007：243〕。この時代は、戦乱と共に天災などの自然現象、怪異といった超自然現象の多発する非常に不安定な社会であり、人々は多くの不安を抱えて暮らしていたことが推察される。

將軍家の病については五件の北斗法修法の記述がある。ここに記されている病は、赤斑創、疱瘡、赤痢である。当時、病は疫鬼・鬼霊・邪気といったものが原因と考えられており、そのために神仏へ

の祈願が盛んに行われた。

北斗法修法の場所については、一二一六年に雪ノ下北斗堂が、一二四一年には大倉北斗堂が建立されており、『吾妻鏡』に場所の記載がある五件（¹⁵¹⁶¹⁹²⁵²⁷）以外は、ほぼ北斗堂と考えてよいのではないか。

『吾妻鏡』の時代、天災や怪異といった自然現象に対して、陰陽師による占いに基づく呪術や祈禱で事態の收拾を図ってきたが、その一つの方法として妙見の要素を持つ北斗法が行われていたと考えられる。

三 鎌倉地域の安倍晴明の軌跡

鎌倉地域では広く知られているが、山ノ内地域に安倍晴明の軌跡が伝えられている。

1 『吾妻鏡』『鎌倉北條九代記』が伝える源頼朝との関わり

（1）『吾妻鏡』…頼朝鎌倉入りの記述から

〔治承四（一一八〇）年〕

○十月六日条…（頼朝は）相模国にご到着になった。（中略）突然のこと故に、頼朝の御所は建てていなかったため、民家を御宿館に定めたという。

○十月七日条…まず鶴岡八幡宮を遥拝された。その後左典厩（源義朝）の御旧跡である亀谷に行かれた。その場所を定めて邸宅をお

建てになろうとしたものの、土地の形が広くなく、そのうえ岡崎四郎義実が義朝の没後を弔うために寺院を建てていたため、お止めになったという。

○十月九日条…大庭平景義が担当して、(頼朝の)御邸宅の工事が始められた。ただし期日に間に合わせるのは難しいので、とりあえず知家事兼道の山内の家を点じて、その建物を移築されることにした。この建物は正暦年間(九九〇～九九五)に建てて以来、火災にあったことがない。(安倍)晴明朝臣が鎮宅の符を押したからである。

○十月十五日条…武衛(源頼朝)が初めて鎌倉の御邸宅にお入りになった。この御邸宅は(大庭)景義が修理を担当していたところである。

○十二月十二日条…亥の刻に前武衛(源頼朝)が新造の御邸へ移られる儀式があった。(大庭)景義を担当として去る十月に工事始めがあり、大倉郷に作られたのである。定刻に(頼朝は)上総権介広常の宅を出発されて、新邸にお入りになった。〔中略〕出仕した者は三百十一人という。また御家人たちも同じく居館を構えた。これより以降、東国の人々は皆頼朝の徳ある道を進むのを目にして、鎌倉の主として推戴することになった。

〔五味・本郷編「1」2007〕

(2) 『鎌倉北條九代記』…『鎌倉新造御館』の記述から

同年(治承四(一一八〇)年)十二月鶴が岡の東のかた大倉の郷に

新御館をたてらる大庭景義おなじく奉行をうけ給はる奇麗大厦の構へは合期の沙汰いたし難ければ先暫らく知事家兼通が山内の宅をうつし立たりそのかみ正暦年中に此宅をつくりし時安倍晴明鎮宅の符をおしけるをもってつひに回祿の災なしとかや同月十一日土木の功をとげしかば頼朝すなはち渡御し給ふ〔中略〕およそ出仕の侍三百十一人御家人等みな思ひくゝに家づくりし館をかまへ命を守り忠をはげます有道順理の政ごとと四方ことくその風に懷て推て鎌倉主と稱じ奉る此所は本より遠境辺鄙の事なれば海郎野人の外には住人すくなかりしに今此時にゐたて大名小名多少の人集まり或は市をたて或は店をかざり家居さらに軒をきしり買賣諸職の輩町をたて小路をとほして山谷村里それくゝに號をさづけ絶たるをつぎすたれたるをおこし鎌倉の荒蕪を刈払って天下の草業を立給ふ武威の輝く事抑頼朝は源家中興の英雄たり〔梅村 1884: 8-9〕

これらの資料から次のことが読み取れる。

治承四(一一八〇)年一〇月七日頼朝は鎌倉に入り、新居を構えるにあたり適地を探すため鎌倉を巡検し、父義朝が館を構えた亀谷を訪れた。しかし土地が狭く、また岡崎義実が義朝を祀る寺院(後の寿福寺)を建てていたことから、東西南に開けた大倉の地に新居を構えることとし、一〇月九日大庭景義が担当し新居の工事が始まった。一方、大倉に新居が完成するまで、山ノ内の知家事兼通の家を点じてその建物を移築することにした。移築先は、資料から特定できないが大倉(現在の鎌倉市雪ノ下)近辺と考えるのが自然であ

ろう。この館は正暦年間に建てられ、未だ火災にあっていないという縁起の良い館で、陰陽師安倍晴明の鎮宅之符が押してあった。一〇月一五日頼朝はこの館に入り、大倉郷が完成するまでの約二か月間をここで過ごしたと考えられる。そして一二月一二日に頼朝は新造された大倉郷の館（いわゆる大蔵幕府（現在の鎌倉市雪ノ下））に入る。御家人三十一人が従う壮大なものだった。「頼朝の鎌倉」誕生の象徴的な日である。

正暦年間に安倍晴明は七十歳代であり、山ノ内の知家事兼道の家の伝承が、安倍晴明が鎌倉へ赴いた証拠であると捉えることもできる。しかしこの資料以外安倍晴明が鎌倉で活動したという記録は残されておらず、頼朝の鎌倉入り以前、辺境の地ともいえる鎌倉に晴明が訪れたということは考えにくい。また山ノ内の知家事兼道の家の移築前の所在については、後述する「安部清明大神」の石碑の立つ明月院踏切前の路傍ではないかとも言われている。

2 安倍晴明の石碑、晴明石等の伝承

JR北鎌倉駅（鎌倉市山ノ内）界限には、現在、「安倍晴明の石碑」を二か所（第六天社、明月院踏切前の路傍）、「晴明石」を二か所（明月院踏切前の路傍、北鎌倉の八雲神社境内）、そして資料から知ることのできる晴明井跡を認めることができる（図2）。これらの石碑等には、いずれも「安倍晴明」ではなく「安部清明」と記されているが、本稿では安倍晴明と記載する。

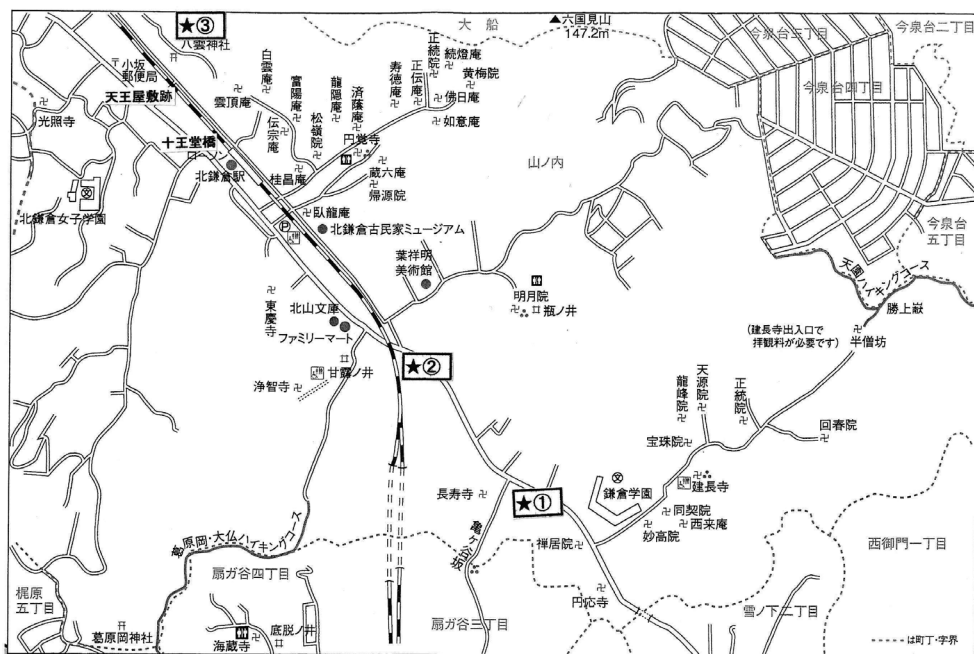


図2 安倍晴明の石碑・晴明石の位置（北鎌倉駅付近）

「鎌倉」（鎌倉市市民生活部観光課編集・発行 2018年6月）の地図「歩いてふれよう古都「鎌倉」」の一部分に、筆者が★①、★②、★③を加筆した⇒★①：第六天社（安倍晴明の石碑）、★②：明月院踏切前の路傍（安倍晴明の石碑と晴明石）、★③：北鎌倉の八雲神社（晴明石）

(1) 第六天社(鎌倉市山ノ内、建長寺前の神社、拝観禁止)

↓安倍晴明の石碑

建長寺山門前の道路を隔てた斜め前の道路沿いに入口の鳥居がある(図2の★①、写真4)。急な階段が続いており、その奥に社殿があるが通常は門が閉ざされていて拝観できない。元旦と例祭(七月一日〜二日)の期間の一日だけ公開されるそう。階段の途中左側には「安部清明大神」と刻まれた石碑(写真5)を見ることができ、この石碑について第六天社を管理している地元の人に伺ったところ、いつここに建てられたのか、誰が建てたものなのか分からないとのことであった。また社殿には第六天像を中心に四天王像が祀られていたが、二〇〇六年盗難にあい失われてしまったとのことである。

『相模風土記』第四卷山之内村条、建長寺に「四方中央鎮神社五神各社なり 東、八幡、西、子神、南、第六天、北、熊野、中央、五大尊、各其所に鎮座す」とあり[蘆田編集校訂 1988: 150]、第六天社は、建長寺の東西南北及び中央の悪霊などをしずめて平穏にするために建長寺管内に祀られた鎮守のうちのひとつと考えられる。

これらの鎮守については『建長寺―そのすべて』に次のように述べられている。

四方鎮守は廃仏毀釈により廃絶させられたが、第六天社だけは町内の鎮守として存続している。東の八幡は、建長寺総門に向かって右手の山腹に立つ住宅裏に境内の痕跡として御神木の切株が残るが

現在立ち入ることは難しい。西の子神は鎌倉学園の北側辺りに位置していたようだ。北の熊野社は、半僧房近くのハイキングコースに御神木と考えられる巨木が残っている。また建長寺三門脇に現在巨福稲荷が祀られている。三門が建てられたころ(一七七五年建立)、その地に鎮守として祀られるようになったとのことであるが、巨福稲荷ができるまでは四方神中央五大尊が祀られていた地であるという。

現在の建長寺の鎮守は境内最奥にある半僧房(二八九〇年静岡県浜松市北区にある臨済宗方広寺の奥山半僧房大権現から勧請された)であるが、



写真4 第六天社(鎌倉市山ノ内)



写真5 第六天社社殿へ続く階段横の「安部清明大神」と刻まれた石碑

半僧房ができるまでは、巨福稲荷社や第六天社が建長寺の鎮守であったことである〔高井監修 2016：42-53〕。

第六天社の門前に掲げられた由緒書きには次のように記されていた。

建長寺の四方鎮守には、中央五大尊と八幡（東）・熊野（北）・子神（西）・第六天（南）があり、第六天は上町に鎮座する。

延宝二年（一六七四）の徳川光圀『鎌倉日記』に「円覚寺ヲ出テ南行シテ、第六天ノ森ヲ見ル」とあり、また、延宝六年（一六七八）の建長寺境内図（伝徳川光圀寄進）には「四方鎮守第六天」と記されている。

社殿に納められた建長寺第二一八世真浄元苗筆の天保二年（一八三二）の棟札によって、宝永四年（一七〇七）に建立した社殿の破損が著しいため、村人が願い出て再建したことが知られる。

社殿の形式は一間社流造で、幕末社殿としては古風を尊重した造りといえよう。

社殿内には第六天像が中心に祀られ、前列には持国天・増長天・広目天・多聞天の四天王像が安置されている（盗難にあい、現在は失われている）。いずれも江戸時代の作で、小像ながらも彫技は丁寧で量感に満ちた佳品である。

第六天は仏教では他化自在天と称し、魔王の如き力を持つといわれ、神道では第六天神、すなわち、第六番目の神と認識されている。

神奈川県内には第六天を祀る社が一八〇社以上あり、厄病除けの神や方位神として信仰される。

現在、建長寺の四方鎮守の中で、その位置と沿革が明らかなのは第六天だけで、建長寺史研究上の重要な資料であるばかりでなく、地域にとっても貴重な文化遺産として永く後世に伝えたい。

また、第六天は上町の氏神でもあり、例祭は毎年七月十五日から二十二日にかけて行われる。

平成七（一九九五）年六月吉日

鎌倉市教育委員会 文化財保護課

鎌倉市山ノ内上町町内会

『鎌倉の民俗』には、大六天は上町だけの氏神であり、上町は下町や中町とちがって、建長寺の門前町としての性格をもっており、建長寺の四方がための守護神であること、祭は山ノ内の八雲神社の祭と同じ日で、八雲さんのツケマツリでもあり、神主さんが祝詞・里神楽（ばか囃子）をあげ、また建長寺の僧侶が読経することが述べられている。〔大藤 1977：344-345〕

『としよりのはなし』には次のような話が語られていた。「松岡は東慶寺の領でわたしの家の南側、三上次男さんへのぼる手前に、大六天がある。そこには大きい楠がある〔現在は無い〕。そこでむかしは何か祈りでもあったらしく、人形を打ちつけた釘があった」。〔鎌倉市教育委員会社会教育部文化財保護課編 1971：192〕

(2) 明月院踏切前の路傍(鎌倉市山ノ内) ↓安倍晴明の石碑と晴明石

J R北鎌倉駅から円覚寺、東慶寺を経て建長寺に向かい、明月院の踏み切りを渡った右側の路傍に「安倍清明大神」裏面に「明治三十九年七月吉日」と刻まれた石碑が立っている。

(図2の★②、写真6)。

かなりの年月にわたって放置されていたらしいが、地元の人が偶然発見して祀ったという。この石を知らずに踏めば足が丈夫になり、知っていて踏めば足が悪くなったり病気になるといういわれがある。また足が悪くなったり人は、石を清水で洗い塩やお線香をあげて拝むと、治るともいわれている。



写真6 明月院踏切前の路傍に建つ「安倍清明大神」と刻まれた石碑～石碑の後ろに晴明石がある

(3) 北鎌倉の八雲神社境内(鎌倉市山ノ内) ↓晴明石

八雲神社は、J R北鎌倉駅円覚寺側の小高い丘の上に立つ山ノ内

の鎮守である(図2の★③、写真7)。毎年七月一日に例祭が行われる。『鎌倉史跡事典コンパクト版』によると「もと牛頭天王社とあった。祭神は須佐之男命。文明年中(一四六九〜八七)に、足利尊氏の母清子の兄上杉憲房が祇園大神を勧請したという」とある[奥富 1999: 291]。

また神奈川県神社庁のホームページには、この八雲神社について「元仁元年(一二二四)十二月鎌倉四境の北境に当たる『山ノ内』で疫病祓いの鬼気祭が斎行された。／この斎場跡に祇園八坂の神霊を勧請して村内の安穩を祈願したのが当社の創立。／例祭の神輿渡御は、山崎北野神社と八雲神輿との『行合祭』で、二基の神輿が勢いを競いながら街中を練り歩く」とある「神奈川県神社庁ホームページ」<https://www.kanagawa-jinja.or.jp/>〈2022.11.13〉。

『吾妻鏡』元仁元年(一二二四)十二月二六日条に「このところ疫病が流行していた。武州(北条泰時)は特におどろかれていたところ、四角四境・鬼気祭⁽¹⁾を行って(疫病を)避けるべきであると、陰陽権助(安倍)国道が申してこれを行った。その四境とは、東は六浦、南は小壺、西は稲村、北は山内という」と記されており「五味・本郷・西田編「9」2010: 52」。地元でも、八雲神社の建つ辺りは、鎌倉時代に四角四境・鬼気祭が行われた斎場跡だと伝えられていることから、八雲神社は、この斎場跡に上杉憲房が京都八坂の祇園社を勧請した神社だといえることができる。

現在、この八雲神社の境内に「晴明石」が祀られている(写真8)が、祀られるに至った経過は『鎌倉の石仏』に次のように記さ



写真7 八雲神社（鎌倉市山ノ内）～JR北鎌倉駅近くの
小高い丘の上にある



写真8 八雲神社（鎌倉市山ノ内）本殿左側にある「晴明
石」



写真9 十王堂橋～JR北鎌倉駅から大船方面へ向かって
少し行ったところにある

れている。

〔八雲神社〕境内にはまた一基の不気味な伝説を持つ自然石がある。清明石とよばれている石で、平安時代の占い師安倍清明の加持祈禱により火災よけの利益があると信じられてきた。〔中略〕／石は、いつのころからか県道の中央に半ば埋もれて残り、わざとふめば足の病にかかり、知らずに踏めば丈夫になるという俗信を生み、やがてふれば祟ると脚色されるようになった。／石は戦後道路舗装のためアメリカ軍によってとりのぞかれ、〔県道沿いの天王屋敷（天王

旅所）に移されたが〕昭和四十四年〔一九六九〕にここ〔八雲神社境内〕に安置された。〔大貫・水澤 1981：46-47〕

（4）北鎌倉の十王堂橋の近辺（鎌倉市山ノ内）・明月院踏切前の路傍↓晴明井跡

『相模風土記』第四巻には、清明石等について「清明石 往還中に二所あり 各大に三尺許 石の傍に各井あり、安倍清明が加持水にして火難を防ぐ奇特ありと云傳ふ 大船村多聞院持」とあり〔蘆田編集校訂 1998：215-216〕、二か所の清明石の傍に「晴明井」が

あると読むことができる。

「清明井」があったと思われる場所の一つは十王堂橋の辺り（写真9）で、かつて「清明石」（現在は山ノ内の八雲神社境内に移されている）があり、その傍に「清明井」があったという話が今も伝えられている。この井戸の水は火難除けの水として大切に扱われていたので山ノ内には大火事がなかったという。もう一つは、明月院踏切前の路傍にある清明石の傍を指していると思われるが、現在は両者とも位置を確認することはできない。また井戸について知る人も見つけられない。

3 資料からみた鎌倉地域に伝わる安倍清明に係る譚

（1）『かまくら子ども風土記 中』『鎌倉市教育研究所編 1993：341』

清明の石 八雲神社の境内には、「清明の石」というひとかかえもあるような石がまつられています。清明の石は、もとは十王堂橋の近くの道路の真ん中に埋まっていました。この石を知らずに踏めば足が丈夫になり、知っていて踏めば足が悪くなったり病気になるといわれていました。また足が悪くなった人は、石を清水で洗い塩やお線香をあげて拝むと、治るともいわれていました。この石を村の人達が大事にしているのです。山ノ内には、大火事がないのだと、人々は信じていました。そこで毎年四月十四日、お供え物をあげてお祭りをしたそうです。／近年道路工事のため掘り起こされ、神主さんにお祈りをしてもらって八雲神社の境内に移されました。／こ

の石の歴史は古く、平安時代に安倍清明という天文や暦を使って占いをする陰陽師がいたので、この人が残したもののという伝説があります。火難よけ、災難よけの神の石として信仰を集め、この石をけがしたりいたずらしたりすると、そのたたりによって、その人が大難を受けるといって、礼を厚くしてまつたといっています。／やはり安倍清明が残したといわれる「清明の井戸」も十王堂橋近くの民家の敷地に残っており、清明の石ともにかつて大船の多聞院が所有していたという記録も残っています。

（2）『としよりのはなし』『鎌倉市教育委員会社会教育部文化財保護課編 1971：197』

戦後になって県道にあった清明さまの石を、進駐軍が道路をなおすとき、ブルトーザーにひっかけて掘り起こしてしまった。土地の人は昔からある神さまだから、というので、天王屋敷へ運んだ（青木）。その後清明石は昭和四十四（一九六九）年に、天王屋敷からさらに八雲神社境内へと移された。／清明井は、清明石の四方固めにあったもので、青木さん、関戸さん、やり屋（青木さんの前）と青木さんの裏（土蔵のうちになっていた）にあったという。清明石は斉藤肉屋の前にあった。

（3）『知られざる鎌倉』『沢寿郎 1985：221-222』

北鎌倉駅のあたりは、清明に関係のあるところだったのでしょいか、「清明石」とか「清明井戸」など彼の名のついたものがいくつ

かあったと伝えられています。／なかでも「晴明石」は、むかしから有名で、うっかりこの石を踏んだりしたらたたりがあるといわれ、人々からあがめられ怖れられていたものだそうです。東京の国立博物館にある『五海道分間延絵図』の中にある「浦賀道見取絵図」を見ると、十王堂橋（鎌倉十橋の一つ）からすこし台の方へ行ったところに、小さい石橋があり、その橋の真ん中に「晴明石」が描かれています。道路の真ん中に大きい石があったのですから、ずいぶん邪魔になったろうと思いますが、地元の人は何百年もの間決してこの石を動かそうとはしませんでした。むかしからの伝承を守りつづけていたのです。／しかし、戦争後あの道路が改修、拡幅されることになり、とうとう「晴明石」も動かされることになってしまい、はじめはもう少し先の左側の「天王屋敷」と呼ばれている空地に移したのですが、その後またそこからも移さねばならなくなり、結局現在は山ノ内の鎮守さまである八雲神社の境内に移されています。ここならば交通事情その他で動かされることもないでしょう。／晴明石は再び安住の地を得て、永くこの地域の安泰を守ってくれることでしょう。

4 鎌倉地域の安倍晴明に係る地域の人の話

（1）山ノ内上町にお住いの五十歳代男性 【二〇二二年九月六日】

○第六天は山ノ内の上町の鎮守。上町では自然と第六天の氏子になるが、同時に鶴岡八幡宮の氏子でもある。中町、下町では鶴岡八

幡宮の氏子は数少ないという。

○八雲神社の祭に合わせて第六天でも祭りを行っている。祭の際に、七月二日頃行われる第六天の開帳では、最初に建長寺の僧侶が読経し、次に御霊神社の神主が祝詞をとる。お供物も寺と神社では異なるので、それぞれに合わせたものに変更してお供えする。神仏混淆の行事ともいえる行事であり、かなり珍しいことだ。

○第六天の仏像は盗まれたので、今は、仏像はない。

○第六天の所有は建長寺であり、二〇一三年には上の社を建長寺が立派に立て直してくれた。上町では今も年に四回ほど町内の人で第六天社の掃除を行い大切に守り続けている。一九六一年には町内会で階段下に倉庫を作り、神輿を納めている。

○第六天社の安倍晴明の石碑については、いつここに建てられたか、誰が建てたのか分からない。

○八雲神社境内には晴明石が祀られており、そばにお稲荷さんも祀られている。お稲荷さんは個人の所有だったが、今は八雲神社の所有となっている。毎年二月ごろ神主さんをよんでこの両者をお祀りしている。

（2）山ノ内下町に永年お住いの八十歳代男性 【二〇二二年九月七日】

○晴明石は県道（十王堂橋付近）、天王屋敷、八雲神社と祀られる位置が変わった。天王屋敷は多聞院の所有地だったが、場所も離れており、毎月お祀りするのも大変だということで八雲神社に移さ

れたようだ。

○私（話者）が子供の頃は、漠然とだが清明石について聞いたことがある。親に清明石に悪いことをすると祟りがあるとも言われた。○今は清明石について話題になることはなく、お参りする人もいないようだ。子供の頃の友人と話しても清明石の話題にはならない。清明井についての話も聞かない。

○清明石の御利益なのかこの辺りでは五〇〜六〇年の間大きな火事はない。

○八雲神社の祭りの時は、神主さん（普段は不在）が本殿に参った後、稲荷さんと清明石にもお参りする。

○清明石もその一つだが、昔から伝わるいろいろな言い伝えはほとんど風化していくようだ。次世代の子供たちにそのような譚を引き継いでいくために資料として残していけたらと思うが、なかなかまとめられない。伝承は生活の一部だと考える。それらの話にはその土地ならではの理由がある。地域に伝わる伝承を知ること、地元を愛し誇りに思う心、地元を大切に思う気持ちが芽生えることと思う。

まづめ

日本では北斗と妙見について様々な解釈が行われ、妙見として北斗を信仰していたこともあったと考えられる。北斗供＝妙見供とは言い切れないが、北斗法、尊星王法、妙見供は、いずれも北斗七星

を供養するものであり、北辰北斗信仰には妙見が反映されていると考えられることから、本稿では、北斗法は妙見の要素が含まれるものとして述べてきた。

『吾妻鏡』には全体を通して一件だけ妙見の記事がみえる。それは寿永元（一一八二）年九月二八日条の「越後国の城四郎永用（長茂）が越後国小河庄赤谷に城郭を構え、その上に、妙見大菩薩を崇拜し、源家を呪詛しているとの噂があった」「五味・本郷編「1」2007: 115」という記述であるが、これは城氏が妙見を武神として尊崇し戦いのときに相手側を呪詛したという内容である。『吾妻鏡』にはこの寿永元（一一八二）年九月二八日の条以外に妙見についての記事はみられないが、妙見菩薩の密教修法の一つである尊星王法の記述が一〇件、妙見の要素を含むと考えられる北斗法が二七件認められることから、『吾妻鏡』の時代（一一八〇〜一二六六）に妙見が武士の間で信仰されていたことが推察される。

日本に伝えられた妙見信仰は、少しずつ形を変えて日本各地に伝播し、その地域の特性を加味しながら時代に沿った様相を繰り広げていったことが知られているが、奈良・平安時代には執政の中心である公家の間で護国の仏神、王者為政の教導神として篤く信仰された。平安中期（九〇〇年代後半）〜平安末期（一一〇〇年代後半）は、政治能力を失う貴族に代わり武士層が台頭し始めた時代でもあり、政治の中心になりつつある武士の間では、妙見は護国の仏神、王者為政の教導神に加え、守護神や武神として信仰されるようになっていく。妙見が武神として信仰されたのは、北斗七星の第七星が破軍

星と言われたため弓箭の神として崇拝されたからである。千葉氏も承平元（九三二）年の染谷川の合戦以降、妙見を武神として信仰するようになったことが伝えられており、この時代、地方の豪族や武士の間で妙見は守護神や武神として信仰されていたという。

日本の武家政権は、治承四（一一八〇）年、源頼朝の鎌倉入りを契機とし、室町幕府、江戸幕府と約七百年間にわたり存続したが、今回調査した『吾妻鏡』の時代は、この七百年間の最初の八十七年間であり、政権が公家から武士へ移行する過渡期であったといえる。

この過渡期の中で勃発した「承久の乱」（承久三（一二二二）年）で朝廷側が敗北したことにより、公家政権は衰え幕府権力が確立し、幕府の力は全国に及ぶこととなった。そしてそれまで朝廷が行っていた国家鎮護のための役割を鎌倉幕府が担うようになり、天変や将軍家の病等に対して数々の祈禱が行われた。祈禱は、仏教、神祇、陰陽道に基づく様々な修法で行われたが、『吾妻鏡』の時代、妙見の要素を含むと考えられる北斗法が二七件、妙見菩薩の密教修法である尊星王法が一〇件行われている。その各々の内容は「鎌倉幕府が行った北斗法」『吾妻鏡』の記事から（資料A）に述べた。

現在、鎌倉地域で北斗法を行っている寺院を見つけることはできないが、かつて北斗堂（大倉北斗堂）が存在した鎌倉市十二所にある明王院でお話を伺ったところ、北斗法が行われた当時を思い人々の除災招福と開運成就を祈って、二三年前まで二月に星供を行っているという。星供は、その年の吉凶をつかさどる星を祀り一年の幸福を祈る伝統行事である。現在、星供と同じような行事として、

中世とは時代も対象も異なるが、不動明王の縁日である毎月二八日に、様々な願いに対して古義に則り本堂で護摩法要が行われ多くの参拝者で賑わっているとのことであった。鎌倉地域では、極楽寺、宝戒寺など他の寺院でも星供が行われており、護摩を焚いて祈りを捧げる行事が現在の生活の中に取り入れられ、人々の生活の拠りどころの一つとなっているという。

「三 鎌倉地域の安倍晴明の軌跡」で述べたが、『吾妻鏡』元仁元（一二二四）年十二月二十六日条に「このところ疫病が流行していた。武州（北条泰時）は特におどろかれていたところ、四角四境・鬼気祭を行って（疫病を）退けるべきであると、陰陽權助（安倍）国道が申してこれを行った。その四境とは、東は六浦、南は小壺、西は稲村、北は山内という」とあるが「五味・本郷・西田編」⁹「2010: 52」、四角四境・鬼気祭を行った安倍国道は安倍晴明の子孫にあたる人物であり、承久三（一二二二）年鎌倉に下向し鎌倉陰陽師として活躍、後の鎌倉幕府に仕える陰陽師の礎となった。初めて鎌倉に陰陽師を招いたのは実朝であるが、四代將軍九条頼経は護持僧や陰陽師を伴い鎌倉に下向してきた。「武士ではなくなった將軍は、鎧兜ではなく、陰陽師の呪術によって身を固めていた」という「佐藤・谷口 2007: 238」。その結果、鎌倉幕府では護持僧や陰陽師によるさまざまな占いや祈禱が広く行われていった。当時、四境の内側が鎌倉と解されていたが、山ノ内の八雲神社境内やその近辺に伝わる晴明石、晴明井、十王堂橋は、鎌倉地域での晴明を印象づけることにより、鎌倉と異界との北の境界を守護する象徴として効

果的な存在となったことが推察される。

一方、第六天社は、『相模風土記』や由緒書から、建長寺での悪霊などをしずめ平穏にするために四方位と中央に祀られた鎮守のうち南に位置した鎮守であることが分かる。第六天社では、様々な修法が陰陽師などによって行われたことが推察される。建立された時期を特定することはできないが、鎮守としてのより強い効果を願い境内に安倍晴明の石碑を建立したのではないだろうか。

現在鎌倉地域では、安倍晴明の軌跡に対して、呪術等への抵抗もなく、ご利益を求めるといふより鎌倉ならではの伝承として誇らしい気持ちを持って大切に伝えられている。京都の晴明神社にも一条戻り橋、井戸、加持水などの伝承があり、現在も多くの人々が御利益を求めて訪れるというが、鎌倉地域の人々も安倍晴明の伝承を大切に守り、現在の生活の中で解釈し、貴重な伝承として次の世代に伝えていく心意気がみられた。

信仰は人の心の中にあり、時代とともに自分にとって都合のいい部分を取り入れ、都合のいいように解釈し変容させ伝えられていくものであろう。そして自分の中で信仰を変容させていくことができるのが人の生きる力であり、同時に人が生きていく原動力となっていると思われる。

人々が重きを置く事項は地域や時代により異なっている。妙見は、時代や地域により様相を変化させてきたが、それは人々が地域をよりよい形で維持していくために妙見を活用し、妙見もそれに応え得る多様性を持った信仰であったからといふことができよう。

今回の調査では、現在の鎌倉地域において直接妙見に結び付く具体的な事象を見出すことはできなかった。したがって現在の生活の中での具体的な妙見の痕跡を明確に述べることはできないが、深く関わりのあるいくつかのテーマに触れることができたと考えている。そして妙見信仰の持つ、時代と地域をより良い形で維持していくという基本的な視点は、現在の生活の中に認めることができるのではないだろうか。

鎌倉の妙見についてはまだ多くの課題を見出すことができる。今後更に調査・研究を重ねていきたい。

注

- (1) 山ノ内は、平安・鎌倉期の広大な山内荘の遺称で、もと鎌倉郡山内村。現在の北鎌倉駅を中心とする山ノ内地域が「鎌倉の内」に含まれ固定化したのは延慶二年(一一三〇九)以前である。建保元年(一二一三)五月七日、和田合戦における勲功の賞として、北条義時が「山内荘」を手中に納め、それ以後、北条氏による開発整備が行われて得宗領化が進み、建長・円覚・浄智・東慶の各寺など、多くの大規模な禅寺が建立されることとなった。『鎌倉の地名由来辞典』三浦編 2005: 188-189)

- (2) 天門日ともいう。中国では外出や出陣を忌む日とされていた。一方、日本では、遠出を忌み、もしも出陣したならば生きて帰ることはできないとされていた。(中国から日本へ「星をめぐる民間信仰」佐野賢治編『星の信仰』所収 窪 1994: 328-329)

- (3) 九坎ともいう。外出や面会などは断って、すべてのことを慎む日とされていたが、さらに、九坎とは九星の精にあたるから、どんなことをやってもいけないといわれていた。その日は、月によってきまっていた、たとえば、一月は辰日、二月は丑日、三月は戌日などとなっていたという。（中国から日本へ一星をめぐる民間信仰」佐野賢治編『星の信仰』所収 窪 1994：329）
- (4) 方位に関する俗信で、日本では位置選定に際し最も悪いとされる北東〔艮^{こう}〕の方角をいう。『山海経』は度朔山上に桃の大樹があり、その北東側の大枝の下に靈魂を意味する鬼の出入り口としての門があると記すが、これをオニとして解釈したものが日本の鬼門であるとの見解がある。鬼門の方角を忌む考え方は、日本では平安時代にすでにみられる。（『日本民俗大辞典上』福田ほか編 1999：477）
- (5) その場をきよめ神々を召して悪鬼をさける呪術的歩行法。北斗七星をふむ形をとる。日本の陰陽道では反閤^{はんがく}ともいう。（中国から日本へ一星をめぐる民間信仰」佐野賢治編『星の信仰』所収 窪 1994：327）
- (6) 疫神の災厄を払うために家の四隅と国の四方の境で行う陰陽道の祭祀。（『現代語訳吾妻鏡』9 五味・本郷・西田編 2010：203-204）
- (7) 暦注で、一年に太歳と太陰と客氣（一説に害氣）とが合うこと。大凶で、この年は災厄が多いとされた。（『広辞苑 第六版』新村出編 2008：1163）
- (8) 白い虹が太陽をつらぬくことで、中国で昔、国に兵乱のある凶兆とされた。白虹は白色に見える虹で兵の象、日は君主の象。（『広辞苑 第六版』新村出編 2008：2266）
- (9) 山ノ内にある臨済宗建長寺派の大本山。鎌倉五山第一位。開山は中国宋の高僧蘭溪道隆、開基は北条時頼。建長五年（一二五三）に落慶供養したわが国最初の禅宗専門道場である。建立の趣旨は、上は皇帝の万歳、將軍家および重臣の千秋、天下太平を祈り、下は源氏三代・北条一族の死者の靈を弔うことにあった。（『鎌倉事典』白井 1995：108）
- (10) 第六天の魔王のことで、他化自在天ともいい、仏法に仇をなす邪神。欲界の第六天の主で、眷属を率いて人の善心を害して世を乱し、仏教に仇をなしてその信仰を妨げるといふ。他化自在天という別称は、他の天がもたらした樂を奪って、自由自在に振る舞うことから来ている。（『日本民俗大辞典下』福田ほか編 2000：23）
- (11) 鬼氣祭は、病腦平癒のために行う陰陽道の祭祀。（『現代語訳吾妻鏡』9 五味・本郷・西田編 2010：204）

引用参考文献

- 蘆田伊人編集校訂
1998 『新編相模国風土記稿』第四～六卷（『鎌倉攪勝考』『新編鎌倉志』を所収） 雄山閣
出雲晶子
2012 『星の文化史事典』 白水社
上田正昭ほか監修
2009 『コンサイス日本人名事典』三省堂
梅村彌右衛門原版・根村熊五郎翻刻出版

- 1884 『鎌倉北條九代記』 思誠堂
大藤ゆき
- 1977 『鎌倉の民俗』 かまくら春秋社
大貫昭彦・水澤清之
- 1981 『鎌倉の石仏』 真珠書院
奥富敬之
- 1999 『鎌倉史跡事典コンパクト版』 新人物往来社
鎌倉市教育委員会社会教育部文化財保護課編
- 1971 『としよりのはなし』(鎌倉市文化財資料第7集) 鎌倉市教育委員会
員会
- 鎌倉市教育研究所編
- 1993 『かまくら子ども風土記中』 鎌倉市教育委員会
金指正三
- 1974 『星占と星祭り』 青蛙房
窪徳忠
- 1994 「中国から日本へ―星をめぐる民間信仰」佐野賢治編『星の信仰』所収 溪水社
国立天文台編
- 2022 『理科年表』2023(机上版) 丸善出版
五味文彦・本郷和人編
- 2007～2010 『現代語訳吾妻鏡』1～8 吉川弘文館
五味文彦・本郷和人・西田友広編
- 2010～2015 『現代語訳吾妻鏡』9～16 吉川弘文館
五味文彦ほか編
- 2016 『現代語訳吾妻鏡』別巻 吉川弘文館
小村純江
- 2020 『妙見信仰の民俗学的研究―日本の展開と現代社会―』青娥書房
小村純江
- 2021 「現在の鎌倉地域における妙見―民俗学的視点から」佐野賢治編
著『現代民俗学考』所収 春風社
- 佐野賢治編
- 1994 『星の信仰―妙見・虚空蔵』 溪水社
佐藤和彦・谷口榮編
- 2007 『吾妻鏡事典』 東京堂出版
沢寿郎
- 1985 『知らざれる鎌倉』 鎌倉朝日
下中直人編
- 2005 『世界大百科事典』14 平凡社
白井永二編
- 1995 『鎌倉事典』 東京堂出版
新村出編
- 2008 『広辞苑第六版』 岩波書店
高井正俊監修
- 2016 『建長寺―そのすべて』 かまくら春秋社
中西用康
- 2008 『妙見信仰の史的考察』 相模書房
平瀬直樹

2013 「日本中世の妙見信仰と鎮宅霊符信仰―その基礎的考察―」『佛

教史學研究』第五六卷第一号 佛教史學會

福田アジオほか編

1999 『日本民俗大辞典 上』 吉川弘文館

福田アジオほか編

2000 『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文館

貫達人

1996 『鶴岡八幡宮寺―鎌倉の廃寺』 有隣堂

貫達人・川副武胤

1980 『鎌倉廃寺事典』 有隣堂

丸井敬司

2004 「鎌倉幕府と妙見信仰―鎌倉幕府で行なわれた尊星王法について

―」『鎌倉』第九十八号 鎌倉文化研究会

三浦勝男編

2005 『鎌倉の地名由来辞典』 東京堂出版

村上重良

1988 『日本宗教事典』 講談社

湯山学

1999 「晴明石の謎―鎌倉山ノ内の内と外―」『鎌倉北条氏と鎌倉山ノ

内』（南関東中世史論集第五集） 光友会

引用参考ホームページ

神奈川県神社庁 <https://www.kanagawa-jinja.or.jp/> (2022. 11. 13)